

源氏物語浮舟巻古写本の仮名遣い

——池田本乙筆と明融本——

みなみ
南
よし
芳
ひろ
公
(本学名誉教授)

はじめに

源氏物語大成の浮舟巻には、「本巻ハ大島本（飛鳥井雅康筆）ガ缺ケテキルカラ、池田本ヲ底本トシタ」とある。また、新日本古典文学大系の源氏物語でも、底本に大島本全五十三冊を一貫して採用するが、唯一の欠巻である浮舟巻は、いわゆる明融本を使用している。その理由として、室伏信助^①は、

大島本の巻と重なる明融本の巻で、他の青表紙本とされる諸本との比較において、大島本との近似値がきわめて高いという判断が挙げられよう。

といい、さらに、

…青表紙原本の一とされた「柏木」巻（前田家尊経閣蔵本）と明融本同巻との比較から臨摸本と認定されたことなどが、大島本の欠巻補充に最も相応しいとする判断を導くのである。
と述べる。

本稿では、浮舟巻について、右の池田本と明融本を対象として、それぞれの仮名遣い（ただし、オとヲのみ）について調査を行う。両本ともに影印本を用い、オとヲの字母・字体にも注目したい。

①池田本（源氏物語大成の底本）

②明融本（新日本古典文学大系の底本）

以上、二つの本文の異同を先ず調査する。^②

一

浮舟巻の池田本において、オとヲを歴史的仮名遣いで使用する語についてみると、〈オ〉の仮名では、用例数、延べ326語。^③〈ヲ〉では、用例数、延べ77語となる。これらを異なり語で、次のようにまとめた（複合語・派生語の立項のしかたで、異なり語数は多少数値が違ってこよう）。

・〈オ〉——83の語例（項目） ・〈ヲ〉——22の語例（項目）

本稿では、前稿⁴⁾までは異なるが、紙幅の関係で、すべての用例を掲げてその所在を示すということはしない。次に、まとめた語例(項目)を掲げておこう。語例は歴史的仮名遣いで表記して、適宜漢字表記を掲げる。

〈オ〉

おいかなり、おきつ「掟つ」、おきな「翁」、おく「奥」、おく「置く」、おく「起く」、おくる「後る・遅る」、おこす「遣す」、おこす「起こす」、おこたり「怠り」、おこたる「怠る」、おこる「起こる」、おしなべて、おす「押す」、おしはかる「推し量る」、おずし「憚し」、おそる「恐る」、おそろし「恐ろし」、おそろしげなり、おだし「穩し」、おつ「落つ」、おと「音」、おとす「落とす・貶す」、おどす、おとど「大殿・大臣」、おとなふ、おとなぶ「大人ぶ」、おとり「劣り」、おとる「劣る」、おどろ「棘・荆棘」、おどろおどろし、おどろかす「驚かす」、おどろく「驚く」、おとろふ「衰ふ」、おなじ「同じ」、おに「鬼」、おの「各」、おのが「己が」、おのづから、おはします「御座します」、おはしましさま「御座しましさま」、おはす「御座す」、おはしどころ「御座所」、おび「帯」、おひさき「生ひ先」、おふ「負ふ」、おふ「追ふ」、おぼえ「覚え」、おぼおぼし、おほかた「大方」、おほかり「多かり」、おほきおまへ「大き御前」、おほきやかなり「大きやかなり」、おほくら「大蔵」、おほけなし、おほしたつ「生ほし立つ」、おほせ「仰せ」、おほせごと「仰せ言」、おほせらる「仰せらる」、おほつか

なし、おほつかなき、おほどかなり、おほとのごもる「大殿籠る」、おほほる「惚ほる」、おほやけおほやけし「公公し」、おぼゆ「覚え」、おぼろけなり、おまし「御座」、おまへ「御前」、おもかげ「面影」、おもさ「重さ」、おもし「重し」、おもおもし「重重し」、おもて「表面」、おや「親」、おゆ「老ゆ」、おやすく、おりもの「織物」、おる「下る」、おりたつ「下り立つ」、おろかなり「疎かなり・愚かなり」、おろす「下ろす」、ねおびる「寝おびる」

〈ウ〉

あをむ「青む」、くちをし、さを「棹・竿」、たをたと、やをら、をかし、をかしげなり、をかしさ、をがむ「拜む」、をこなり、をさなし「幼し」、をし「惜し」、をち「彼方・遠」、をち「伯父・叔父」、をここ「男」、をのこ「男」、をやむ「小止む」、をり「折」、をりをり「折折」、をりから「折柄」、をり「居り」、をる「折る」

池田本で、歴史的仮名遣いに一致する例をみると、〈オ〉のグループでは用例数246、〈ウ〉のグループでは用例数35である。また、池田本と明融本の仮名遣いが一致する例は、〈オ〉では用例数267、〈ウ〉では用例数45で、両本の仮名遣いが異なる例は、〈オ〉では用例数54、〈ウ〉では用例数32である。他に、〈オ〉のグループでは、漢字表記と仮名表記との違いが5例みられる。前記の延べ326例から5例を除いて、あらためて表にまとめてみると、次のようになる。

【表Ⅰ】池田本と明融本の仮名遣い（オとヲ） ※この表では、「越」はヲと同表記として数える。

同表記		用例数		百分率
異表記	〈オ〉	267	約83%	
	〈ヲ〉	45	約58%	
		54	約17%	
		32	約42%	

〈オ〉より〈ヲ〉のほうが両本の仮名遣いの一致度が低いといえよう。次に、前稿②④⑤⑥⑦の柏木巻・早蕨巻・行幸巻・夕霧巻・若紫巻での調査と同じく、便宜、大野晋の掲げた「藤原定家の仮名遣実例」などによって、定家の仮名遣いとの一致度をみることにしよう。^⑤定家の仮名遣いと一致する語例（同表記例）をそれぞれ数えてみると、表Ⅱのようになる（大野の資料にない語例は、仮名遣いの確認ができないものとして表の数値には入れない）。

【表Ⅱ】定家の仮名遣いと同表記例／異表記例（オとヲ） *カッコ内は百分率

備考	異表記例		同表記例		池田本	明融本		
	〈ヲ〉	〈オ〉	〈ヲ〉	〈オ〉				
*別に漢字表記	30 (43%)	40 (13%)	40 (57%)	261 (87%)		A定家筆部		
	3 (50%)	0	3 (50%)	22 (100%)		A以外		
	4 (6%)	19 (7%)	60 (94%)	261 (93%)				

石田穰^⑥二は、明融本の浮舟巻について、

原本は、本文墨付九丁裏あたりまで、書写が大ぶりで、定家自筆であつたかと思われる。

と述べている。表Ⅱでは、明融本をA定家筆部とそれ以外（A以外）に分けた。明融本は、A定家筆部の〈オ〉では、100%同表記であるが、A定家筆部の〈ヲ〉になると、同表記と異表記例が50%ずつとなる。その〈ヲ〉の用例（計6例）をすべて掲げてみよう^⑦（○が同表記、△が異表記例）。

△くち乎しくて1オ⑤(新190③)、△乎かしう1オ④(新190②)、○於かしう9オ⑤(新195⑦)、○於さなき人9ウ⑧(新195⑬)、△乎りくは1ウ①(新190⑤)、○於りく4ウ⑥(新192⑧)

定家の仮名遣いに一致しないのは、いずれも「乎」の仮名であり、明融本の1丁に使用されている。よく知られているように、土佐日記の冒頭「男もすなる」の「男」は、青谿書屋本で「乎とこ」とあり、定家本でも(定家の仮名遣いでは「おとこ」であるにもかかわらず)「乎とこ」であった。従って、明融本でも、定家本での(書本を尊重した)定家の意図どおりに、「乎」を用いたと考えれば、定家筆部は、〈オ〉〈ヲ〉いずれも定家本を忠実に模写したものと思われる。また、前稿③⑤⑦でもふれたが、「猶」の表記についてみると、定家筆部には全3例あり、漢字表記「猶」は2例目と3例目で、冒頭(1丁1行目)にみえるのは「なを」の仮名表記であり、これも書本(親本)を尊重したものであろうか。⁽⁸⁾

二

明融本の定家筆部以外(A以外)における異表記例をみておくことにしよう。先ず〈オ〉では全19例(7%)である。

於かせ給て「置く」71オ③(新249⑩)、かき於きて「置く」

77ウ②(新255⑮)、於こたりて「怠る」69オ⑨(新247⑭)、越そろしく「恐ろし」78オ②(新256⑧)、越ちごり「落つ」56ウ①(新235⑪)、あし於と「音」30オ③(新212⑮)、かねの於と「音」78ウ⑥(新257④)、にをとり「劣る」26オ⑧(似)新209⑫)、於ほえ越とる「劣る」31ウ⑨(新214⑨)、越ところかる、「驚く」31ウ④(新214⑤)、(あた越)、「に」[鬼]74ウ⑦(新233⑨)、おのつから70オ⑪(新248⑮)、越び「帯」76オ②(新234⑪)、越ほつかなく57ウ②(新236⑩)、をほ、れ「惚ほる」21ウ⑩(新205⑬)、於もく「重し」69オ⑧(新247⑬)、於もく「重し」69ウ②(新248②)、於もくくしく「重し」55オ③(新234⑦)、越りて「下る」60ウ⑤(新239⑪)次いで、〈ヲ〉の異表記例は、全4例(6%)である。

あ越み「青む」46ウ③(新227②)、あをみ「青む」53ウ⑤(新233④)、さ越「棹・竿」56ウ①(新235⑩)、於のこ「男」69オ⑩(新247⑭)

本文79丁のうち、〈オ〉〈ヲ〉の異表記例は、前半に5例、後半には18例(うち53丁以降に17例)存していて、あとのほうほど、異表記が多くなる。また、オは基本的に「於」であるのに、自立語で唯一の「お」(おのつから)の字体が70オにみえる。

池田本のほうは異表記例が多く存する。先ず〈オ〉では全40例(13%)であるが、〈ヲ〉の異表記例は、全30例(43%)もある。こ

こでは、〈ヲ〉の異表記例を掲げておこう。

あをみ「青む」52ウ②(大成1886④)、あ越み「青む」59ウ⑪(大成1902①)、くち越しくて1オ⑥(大成1859③)、くち越しからぬ12オ③(大成1866④)、くち越しきこと57ウ④(大成1876⑫)、くち越しきこと29オ⑤(大成1878①)、くち越しう29オ⑨(大成1878③)、くち越しきや66オ②(大成1906⑫)、くち越しく82ウ⑧(大成1919⑨)、さば63オ③「棹・竿」(大成1904⑧)、越かし12ウ⑧(大成1866⑪)、越かしき20ウ②(大成1871⑫)、をかしう28ウ②(大成1877⑧)、をかし30オ②(大成1878⑩)、をかし34ウ①(大成1882③)、越かしう41ウ⑪(大成1887⑫)、をかしく47ウ⑦(大成1892⑨)、越かしき人85オ②(大成1921③)、をかしけなり29ウ⑧(大成1878⑧)、越かしけに30オ⑥(大成1878⑬)、越かしけなる30オ⑪(大成1879①)、越かしけなり48ウ②(大成1893③)、をかしけなり33ウ⑩(大成1897④)、をかみ「拌む」38ウ⑧(大成1885⑧)、心をなうは「幼」26オ⑥(大成1875⑩)、於の「男」71オ⑦(大成1910⑪)、おの「男」78オ⑤(大成1916③)、をりから「折柄」47ウ⑥(大成1892⑧)、ものを「折る」17ウ⑨(大成1869⑭)、於り「居り」66ウ①(大成1907③)

〈ヲ〉の異表記例には、語による偏りがみられる。クチヲシは全

7例であるが、すべて「くち越し」となっていて異表記である(定家の仮名遣いでは「お」。ヲカシ(全19例、定家の仮名遣い「お」は、8例が異表記。ヲカシゲナリ(全7例)も5例が異表記である。異表記は、〈ヲ↓オ〉(於2、お1)よりも〈オ↓ヲ〉(を11、越15)のほうが多い(他に〈ヲ↓ホ〉1例)。これまでの小論での調査をふまえてクチヲシの表記を一覧すると、次のようになる(浮舟巻のみ「お」「於」を分別している)。

定家本 若紫巻Ⅱ全6例「お」 花散里巻Ⅱナシ

行幸巻Ⅱ「お」1例・「越」2例

柏木巻Ⅱ全11例「お」、クチヲシガル(全3例「お」)

早蕨巻Ⅱ全3例「お」、クチヲシガル(全1例「お」)

明融本 浮舟巻Ⅱ全6例「於」*「くち乎し」1例は除く

池田本 若紫巻Ⅱ「お」5例・「越」1例

夕霧巻Ⅱ「お」5例・「越」1例

浮舟巻Ⅱ全7例「越」

定家本では、行幸巻の例を除けば、すべて定家の仮名遣いどおりである。明融本も先に述べた「くち乎し」という特別な例を除けば、すべて定家の仮名遣いどおりとなる。さらに、池田本も若紫巻・夕霧巻ではほぼ定家の仮名遣いに一致していたのに、浮舟巻ではすべて「越」が用いられている。次に、ヲカシとその派生語もみてみよう。

定家本 若紫巻Ⅱ全21例「お」、ヲカシゲナリ(全4例「お」)

花散里卷Ⅱ全1例「お」

行幸卷Ⅱ全7例「お」、ヲカシサ（全1例「お」）

柏木卷Ⅱ全5例「お」、ヲカシゲナリ（全1例「お」）

早蕨卷Ⅱ全6例「お」、ヲカシゲナリ（全1例「お」）

明融本 浮舟卷Ⅱ全18例「於」 * 「乎かし」 1例は除く、ヲカ

シゲナリ（全7例「於」）、ヲカシサ（全1例

「於」）

池田本 若紫卷Ⅱ全21例「お」、ヲカシゲナリ（全4例「お」）

夕霧卷Ⅱ「お」14例・「を」1例、ヲカシゲナリ（全

4例「お」、ヲカシバム（全1例「お」）

浮舟卷Ⅱ「於」11例・「を」4例・「越」4例、ヲカシ

ゲナリ「於」2例、「を」2例、「越」3例）、

ヲカシサ（全1例「於」）

ヲカシ（その派生語も含む）は、定家本では、完全に定家の仮名遣いどおりである。明融本もやはり1丁オの「乎かし」を除けば、すべて定家の仮名遣いどおりである。そして、池田本も、若紫卷では定家の仮名遣いに一致し、夕霧卷でもほぼ一致していたのに、浮舟卷では、異表記が多い。

三

前稿⑥で、池田本の本文そのものについての解説を引いたが、再び確認することになろう。岡寫偉久子によれば、池田本全五十二卷のうち、

基幹卷四十八卷は書写者がほぼ二手（甲筆・乙筆とした）に集約される。中でも甲筆とした三十六卷は整った一定の筆致

であるといい、一方で、

乙筆は、甲筆に比してはいくらか筆致が柔弱である。また、卷によっても、同一巻内においても、微妙に筆致・墨色の変化が認められる箇所もある。

という。若紫卷・夕霧卷は甲筆卷である。これに対して、浮舟卷は乙筆卷である。

また、岡寫偉久子は、浮舟卷について、
明融本と池田本とに共通して存在する七卷のうち、池田本筆者が乙筆である巻は当巻のみである。

と述べていて、和歌書写形式や合点など、両本の状況を比較しているが、右の点からも比較・検討が難しい、という。⁽¹⁰⁾ここで、乙筆である浮舟卷と、すでに小論で扱った甲筆（若紫卷・夕霧卷）との比較（百分率）を、あらためて表にしてみよう。

【表Ⅲ】池田本における定家の仮名遣いと同表記例／異表記例（オとヲ） ※この表では、「ヲ」に「越」を含む。

異表記例	同表記例		甲筆（若紫巻）	甲筆（夕霧巻）	乙筆（浮舟巻）
	〈ヲ〉	〈オ〉			
異表記例	1 %	4 %	99 %	96 %	
	9 %	6 %	91 %	94 %	
	43 %	13 %	57 %	87 %	

甲筆は、〈オ〉〈ヲ〉ともに定家の仮名遣いとの一致率が高い。当然ともいえるが、定家本でも総じて一致率は高かった。ところが、池田本乙筆である浮舟巻は、〈オ〉では9割に満たず、やや低いし、〈ヲ〉ではむしろ一致率が低すぎるといえよう。

甲筆において、オの仮名の字体は「於」（草体）のみであるが、乙筆では、オは「於」「お」の二種の字体があり、そのうえ、オホの連続における「於」の字体は、複雑な様相を呈する。冷泉家時雨亭文庫所蔵の俊成・坊門局・定家・為家の自筆本について、文字の連続「オホ」の表記を調査した豊田尚子によれば、藤原定家自筆本におけるオホの主用表記は「於ほ」（於は、字母に近い草体）である、という。また、定家や為家の場合、漢字が多用されること

もあって字体間の密着度は俊成・坊門局ほど高くない、という。

池田本乙筆浮舟巻では、オホの表記は、「於ほ」（於は草体）の連続例（例・於ほしわする、1オ②）・連綿例（例・於ほせは36オ⑧）がある。そのオホの連綿には、於の旁1画目から「ほ」（くずし）へと続くもの（例・於ほえなき21ウ⑧）や、オホの字形がほとんど読み取れず「ほ」（かなりくずす）へと続くもの（例・おほしうたかひ5オ⑤*「お」で表記）もあり、字形にかなりのユレがみられる。管見に入った例で、石水博物館蔵・伝源頼政筆源氏物語「早蕨」一帖に、右例（5オ⑤）のようにオホが一体化しているような例がみえる¹²⁾。書写年代は鎌倉時代中期頃か、といい、極札ウラに「源氏物語六半本早蕨之巻一冊……」とある、という。また、その本文は陽明文庫本にかなり近いとみられる、とのことである。

同じく伝源頼政筆柏木巻があり、こちらも古筆極札に「六半本」とある、とのことである¹³⁾。曾澤太吉によると、鎌倉時代初期写で、「横山本・肖柏本の性格を示すに役立つと言うべきであろう」という。この柏木巻にも、オの字形は異なるようだが、オホ（ホはかなりくずす）の連綿の例がみえる。

ところで、今回の調査では、陽明文庫本を対象としなかったのであるが、浮舟巻の影印をみると、同じ字形というわけではないが、池田本のようにオホが一体化しているような例がみえるのである。なお、陽明文庫本を通して確認する機会を得たい。

このようなオの字体・字形に関することは、甲筆である若紫巻・夕霧巻にはみられなかったことである。

四

石田穰⁽¹⁵⁾二は、源氏物語大成の浮舟巻の校異にあげられている青表紙本に、調査の主軸とした明融本、底本池田本、それに吉田本を加えた八本について、本文調査を行っているが、それによれば、

明融本、平瀬本、横山本に対して、一方に榊原家本、吉田本があり、この間に三条西家本、肖柏本、池田本が浮動して、勢力地図ができ上る、と概言し得るやうである。

という。また、先に石田の明融本浮舟巻の解題を引いたが、

池田本の本文状況はあまり良好とは言えないから、明融本本帖の存在は貴重である。

ともいつている⁽¹⁶⁾。加えて、吉岡曠⁽¹⁷⁾は、源氏物語大成の浮舟巻の校異に採択されている青表紙本六本と明融本との異同を、数値にして表に掲げているが、それによれば、

明・平・肖グループと池・榊グループが大きく対立し、中間に横山本と三条西家本とが位置する。(平≡平瀬本、肖≡肖柏本、榊≡榊原家本。以上、筆者注)

という。明融本は、池田本と同文66箇所、異文189箇所という数値を

示す。

右の両説に対して、前記の岡嶋偉久子は、浮舟巻池田本と明融本の本文について、「巻を通して、細かな範囲の異文箇所があるもののよく近似している。」といい、「両本間の本文異同は極めて小さな幅のものがほとんどである。」として、

明融本と池田本とは「大きく対立」している本文というわけではなく、比較的近似した本文である。

とみる。そのうえで、

明融本本文との微妙な異なりからは、その親本は明融本の親本とは異なった定家本であったということになろう。

と考えている。

池田本乙筆である浮舟巻は、定家の仮名遣いからも、オの字体・字形に関することなどからも、定家本とは距離があるように思われる。浮舟巻池田本には、岡嶋によれば、本文と同筆の細字で、処々に脱文の補記や修正が行われている、といい、仮名遣いの訂正もみられる。オ・ヲに関わる例として、岡嶋が挙げている例をみる。

於ところかいたてまつり67オ^⑨(大成1907⁽¹²⁾)—*「を」見せ消ち、

「於(草体)」書き入れ

ほかにも次に掲げる例がある。

於ちと、まりて80ウ^⑧(大成1918⁽²⁾)—*「を」見せ消ち、「於(草体)」書き入れ

また、これも岡寫の指摘があるが、字母の訂正もみられる。少し例を挙げる。

けふは29ウ①―*「ハ」見せ消ち、「者（草体）」書き入れ

あはれ33ウ①―*「者（草体）」見せ消ち、「ハ」書き入れ

仮名遣いや字母まで修正しているのは、親本に忠実であろうとする態度のあらわれか。前掲の石田の解題では、「池田本の本文状況はあまり良好とは言えない」とあったが、定家本を基準に考えるとそうなるう。ただ、池田本の親本が定家本とは別の系統であったとしたら、どうであろうか。前稿⑦で、仮の命名ではあるが、定家監督本A系と定家監督本B系という、少なくとも二つの本文の系統があつて、それが定家本のグループと、池田本のグループとの本文の異同に現れているのではないかと考えたのであるが、池田本乙筆である浮舟巻は、甲筆とはさらに別な親本を想定すべきなのか。大島本で唯一の欠巻である浮舟巻は、乙筆のなかでも、他巻とはまた違った位置づけになるのであろうか。池田本他巻についてのさらなる調査が必要であらう。

《注》

(1) 新日本古典文学大系『源氏物語五』（1997年）解説の「明融本『浮舟』巻の本文について」（室伏信助）。

(2) ①は、新天理図書館善本叢書第22巻『源氏物語 池田本十』「第四十

六冊 浮舟」（2018年）の影印にもとづき、筆者が翻字した本文を使用した。その際、仮名の字体は現行のものに改めたが、ヨについては、「を」と「越」の区別を残した。また、オについては、詳しくは後述するが、少し複雑である。一応、「お」「於」に大別することにした。

②は、東海大学蔵桃園文庫影印叢書第二巻『源氏物語（明融本）Ⅱ』の「浮舟」の影印を参照しつつ、新日本古典文学大系（以下、新大系本という）の浮舟巻の本文によることにした。従つて、補入などは新大系本での扱いをもととした。新大系本の凡例には、「底本の本文を尊重し、手を加えないことを原則」としてのとおり、また、「仮名遣いは、底本のままとし、本文が歴史的仮名遣いに一致しない場合には、（）でそれを傍記する。」とある。なお、影印によつて、「於」「お」「を」「越」「乎」の区別は残した。

(3) 池田本の本文を基準に用例を数えたが、異文で明融本にない語が3例ある。オハシマス2（異文オハス）、オハス1（異文オハシマス）で、いずれの異文もオの仮名は「於」。また、異文で池田本になく明融本にある語が3例ある。オモテ2（於もて15ウ④、越もて65オ③）、ヲカシ1（於かしう43オ⑤）。なお、前稿にならつて、紙幅の関係もあり、「おもふ（思ふ）」など一部の語は本論で取り上げない。ここで、少し表記をみておく。オボシメス全4例。池田本は「於」「おほ」の連綿を含む）、明融本は「於」「オボス」全131例。池田本「於」77、「おほ」53（連綿を含む）、「越（、）」1、明融本は「於」125、「お」1、「越（、）」2、

1、異文2（うち、「於もほし」1）。オモフは、合計193例。池田本の漢字表記51、「於」138、「越（、）」3、「を」1。明融本の漢字表記67、「於」124、「を（、）」2。オモフの派生語などは略する。

また、助詞のヲは、合計365例ある（池田本の本文での数値）。池田本は、「を」156、「越」209で、「越」が多い。明融本「を」300、「越」54、「お」5、当該語ナシ6。明融本は断然「を」が多い。明融本の本文には、異文で別に、「を」6例がある。

(4) 本稿では、筆者が先に執筆した前稿について、次のように番号を付した。

前稿①は、「源氏物語玉鬘巻古写本の表記―歴史的仮名遣いと定家仮名遣い―」（『國學院大學栃木短期大学紀要』第48号、2014年3月）。前稿②は、「源氏物語柏木巻古写本の仮名遣い（上）―定家本と大島本・河内本・陽明文庫本―」（『國學院大學栃木短期大学紀要』第51号、2017年3月）。前稿③は、「源氏物語柏木巻古写本の仮名遣い（下）―定家本と大島本・河内本・陽明文庫本―」（『國學院大學栃木短期大学紀要』第52号、2018年3月）。前稿④は、「源氏物語早蕨巻古写本の仮名遣い―定家本と大島本・河内本・陽明文庫本―」（『國學院大學栃木短期大学紀要』第53号、2019年3月）。前稿⑤は、「源氏物語行幸巻古写本の仮名遣い―定家本と大島本・河内本・陽明文庫本―」（『國學院大學栃木短期大学紀要』第54号、2020年3月）。前稿⑥は、「源氏物語夕霧巻古写本の仮名遣いと特異な表記―池田本と大島本、河内本・陽明文庫本―」（『國學院大學

栃木短期大学紀要』第56号、2022年3月）。前稿⑦は、「源氏物語若紫巻古写本の仮名遣いと本文の系統―定家本と池田本・大島本、河内本・陽明文庫本―」（『國學院大學栃木短期大学紀要』第58号、2024年3月）。

(5) 大野晋「仮名遣の起源についての研究」（『仮名遣と上代語』所収、1982年）の本文および「仮名遣の起源についての研究」資料の「一 藤原定家の仮名遣実例」。同「仮名遣の起源について」（『国語と国文学』1950年12月号）参照。

(6) 東海大学蔵桃園文庫影印叢書第二巻『源氏物語（明融本）Ⅱ』（1990年）の石田穰二の解題による。

(7) 各用例のあとに、明融本の丁数とオモテ・ウラの別・行数（丸数字）を記す。あわせてカッコ内には新大系本（新）の頁数・行数（丸数字）を付す。後掲の池田本の用例では、池田本の丁数とオモテ・ウラの別・行数（丸数字）を記し、あわせてカッコ内には源氏物語大成（大成）の頁数・行数（丸数字）を付す。なお、洋数字の二桁以上は横書き。

(8) 「猶」は、池田本計35例。表記は、「な越」17、「なを」3、「猶」15。「越」がやや多い。明融本は、異文の関係で計36例。「越」はない。「を」10、「猶」26で漢字表記が多い。

(9) 新天理図書館善本叢書第13巻『源氏物語 池田本 一』（2016年）の岡嶋偉久子「源氏物語 池田本」解題―書誌的概要―による。

(10) 新天理図書館善本叢書第22巻『源氏物語 池田本 十』（2018年）

の岡嶋偉久子「各巻の書誌的事項（付）池田本と伝明融筆臨模本―書写様式・合点その他の様相から―浮舟巻」による。

- (11) 豊田尚子「冷泉家時雨亭文庫蔵書の仮名文における「オホ」表記について―俊成・坊門局・定家・為家の自筆本に注目して―」『鎌倉時代語研究』第23輯（2000年）。主用表記「於ほ」の正確な字形は、当該論文を参照されたい。

- (12) 久保本秀夫「『源氏物語』の巻別本、研究の可能性―石水博物館蔵「早蕨」丁子吹き装飾料紙一帖の紹介を兼ねて―」『源氏物語 本文研究の可能性』（2020年）。「早蕨」一帖の影印が付されていて、2丁ウ④（おほされぬ）などに当該例を確認できる。

- (13) 天理図書館善本叢書と書之部第30巻『源氏物語諸本集二』（1978年）解題（曾澤太吉）。

- (14) 陽明叢書国書篇第十六輯『源氏物語十五』（1982年）浮舟巻。

- (15) 石田穰二『源氏物語論集』（1971年）の「明融本浮舟の本文について」（初出は、『東洋大学紀要』第14集、1960年5月）。

- (16) 注6に同じ。

- (17) 吉岡曠『源氏物語の本文批判』（1994年）第三章 青表紙本諸本の系統「十 浮舟巻」（第三章の初出は、『文学』1986年7月、同10月）。